本実践・研究から見えてくること

研究協力者　小池　孝範
（秋田大学大学教育文化学部）

多面的・多角的に自分の生き方を見つめることができる授業づくりの試み

平成30年度から「特別の教科 道徳（以下，道徳科）」として実施され，教科化2年目，また3年計画の研究の2年目となる今年度は，「道徳的価値に照らして，より深く，より豊かに考え，自己の生き方を見つめ直す子どもの育成」を昨年度から引き続いて研究テーマとしている。その上で，今年度の研究テーマとして「（1）子ども自身が問題意識をもつことができるための導入の工夫」と，「（2）多面的・多角的に自分の生き方を見つめることができる授業づくりの手立て」が設定された。このうち，研究の重点の（1）は昨年度から継続した取り組みである。

重点（2）は，学習指導要領の改正にともない，道徳科の目標の中に「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」とすることが示されたことから設定されたものである。附属小学校道徳部では，この「多面的・多角的」について，事前検討会等を通じて，「多面的」については「ある道徳的価値について，見方を変えたりしながら複数の側面から考えること」，「多角的」については「ある（道徳的）行為について，複数の道徳的価値に照らしながら考えること」と定義した。

このうち，「多面的」の部分については，これまでの研究について「対話」の工夫として取り組んできた。本実践研究では，導入部でのアンケート結果を提示する際，結果を示すだけでなく，その理由について確認することを通して，同一の結果でも理由が異なる場合があることや複数の回答の間で迷いがある子どもたちの意見にふれ，「多面的」に考えるきっかけとなっていた。それを促していたのは，授業者が「Ⅲ 研究実践」の「2 成果（1）」で示している二つの留意点であった。この，導入部分で「多面的」な見方を提示する試みは，話し合いたい場面の焦点化につながり，「（1）子ども自身が問題意識をもつことができるための導入の工夫」にもなっていた。

また，「多角的」については，「なぜ司祭は怒らなかったのか」の問いについて，その理由のみならず，その背景をさらに問うことで，司祭のジャンに対する【思いやり】や【信頼】，司祭の【寛容】や【謙虚】等，多様な道徳的価値への気付きを促していた。こうした多様な価値をもとにすることで，本授業実践のねらいである【寛容】について，児童の深まりと奥行きのある話し合いと理解につながっていた。

以上の点から，本授業実践は学習指導要領改正の趣旨をふまえた，提案性のある授業になっていたと概括することができるだろう。さて，研究実践報告の中で，授業者である小室先生は，課題として「教師のコーディネート」による部分が大きく，子ども同士の問いかけによる展開が不足していたことをあげている。確かに，本授業実践においては，基本的には教師が授業全体をコーディネートしていた。しかし，これまでの道徳の授業の課題とされる「特定の価値観を押し付けたり，主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導する」ものではなかった。むしろ，複数の道徳的価値を子どもたちから引き出す場面などは，「教師のコーディネート」なしには展開されなかったであろう。もちろん，「子ども同士の問いかけによる展開」はひとつの理想型であり，目指すべき姿ではあろうが，子どもの多様な意見を引き出すことは，「教師のコーディネート」の力量に負うところが大きい。その先に「子ども同士の問いかけによる展開」を見通しつつ授業実践を重ねていくことが，その実現につながっていくことであろう。